
気ままに短編集

小野宮右京

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気ままに短編集

【Nコード】

N3043P

【作者名】

小野宮右京

【あらすじ】

文学少女の二次創作、というのは建前で、内容はほとんどオリジナルです。推理物からホラー、恋愛、イメージ物（曲などからイメージしたもの）など、色々書いてみます。短編も書き始めました。理由は短編『大切なもの』にて。（2011/8/17タイトル変更）

手始めに挨拶でも……………（前書き）

とりあえず、最初は簡単な挨拶です。

手始めに挨拶でも……………

皆さんは、三題噺を知っているでしょうか？

三題噺とは、本来落語の一つで、お客が任意に出した三つの題を使い、その場で一席の落語にまとめて演じるものです。

そう、本来は落語なのですが、この『気ままに三題噺』では、同じように三つのお題から一つの短編を作り上げる、一種の短編集のよくなものです。

これは、作者である私、私の通っている高校の友人、中学時代の友人から三つのお題を発表して、書いていきます。もちろん、読者の皆様からお題を募集し、書くこともあるでしょう。（もちろん、送ってもらえれば書きますよ）

では、駄作者沫乃が描く、三題噺の世界を、とくにご覧あれ。

手始めに挨拶でも……………（後書き）

次回から、本格始動します！

読者様からも、お題を募集しますので、感想と一緒に添えてくださったら、嬉しいです。

では、次回をお楽しみに！

『自由になる私』（前書き）

お題：彼・鳥・自由

今作一発目の主人公は、一人の少女です。

内容は深く語りません。しかし、なかなか奥の深いものになっていくと思います。

では、どうぞ！

自由になる私

『生まれ変われるのなら、私は鳥になりたい』。これは、私が小学校からの、つまり、昔からの願い、もしくは夢だ。

だって、鳥は自由なのだから。無限に広がるこの空を、自由に、どこまでも羽ばたいて行けるのだから。

だから、私はそこに憧れた。自由になりたい。春の桜舞う出会いの空を、真夏の太陽輝く暑い空を、夕焼けが煌めく秋の空を、雪が舞い眼下のイルミネーションの光が反射してキラキラ光る空を、私は自由に飛びたかった。子供っぽいと思われていい、それが私の夢なのだから。

だけど、運命は残酷だ。私は人としての人生を十七年間送り、そして、今に至っている。

残酷だ、といっても、その人生が嫌だった訳ではない。親しい友人もいたし、楽しい出来事も沢山あった。もちろん、彼氏もいた。そう、それなりに有意義な毎日を過ごしていたのだ。

でも、そんな毎日も、唐突に終わりを告げた。私に対する、執拗なまでのイジメが始まったのだ。

始まりのきっかけは、私もイマイチ覚えていない。でも、最初はよくありそうな無視から始まり、次に物盗り、と徐々にエスカレートしていった。最終的に、今現在の、暴力に至った。殴る蹴るなんて日常茶飯事、時たま、カッターナイフで切られたこともあった。

それでも私は、周りの人に、友人に、彼に迷惑をかけたくなくて、我慢して、我慢して、時には反発して追い払ったり、と色々やったけど……………

「もう、こんな日を送るのは……………いや……………」

静かに叫び、私は所々赤い斑点の付いた、お気に入りだった白いコートを脱ぎ、ノースリーブのワンピースだけになる。腕や脚に、今まで受けた暴力の傷痕が生々しく残っているけど、今はもう関係ない。そう、今から私は、自由になるのだから。

一歩踏み出した瞬間、私の頭の中に、ふとキミの顔が過ぎった。ちよつと怒らせちゃって、拗ねたようにプクツと頬を膨らませるキミ、面白いことがあつて、涙目になつて大笑いするキミ、落ち込んだ私に、優しい表情をして撫でてくれたキミ。傷つけられても、助けに来てくれて「彼女から離れるおおっ！」って言うてくれたキミが、忘れられない。あと、私を庇ってくれて、仲良くしてくれた友人。彼等と、キミと過ごした日々が、私の唯一の宝物だった。

先に言うておくね。あなたたちを悲しませることになるかもしれない。でも、私はもう、我慢出来ないの。ごめんなさい、先に逝つてるね。

更に一歩踏み出す。瞬間、後ろのドアが勢いよく開いて、彼等が出てくる。口々になにか言ってるけど、私の耳にはもう届いてない。唯一届いた声は、キミの「止めるおおっ！」って叫ぶ、強い声だった。

私は最後の一步というところで振り返り、彼等の方に向き直つて、多分今まで生きてきた中でも、最高に綺麗な笑顔を見せて……………

「また、ね？」

そう言っつて、私は空に飛び出した。キミが手を伸ばしてくれたけど、もう遅かった。

ゆっくりとした時間の中、私の目尻をあたたかい液体が流れていった。これは、涙？

「ごめん、大好きだったよ」

其の声は誰にも届かず、私は永遠の時の中へ、飛び出した。

鳥に生まれ変われたら嬉しいけど、また人間だったら、今までみたいな人生じゃなくて、ホットミルクみたいな、甘くてあったかい、そんな人生を送りたいな

END

く自由になる私く（後書き）

いかがでしょうか？

賛否両論だと思いますが、感想など、お待ちしております。

〱冬の日の再会〱（前書き）

お題：公園・星・初恋の人

二つ目です。

これは、一番最初に下書きが終わったモノで、内容的に一番好きな
ものです。

ちよつとだけせつなく甘い、そんな冬の不思議な物語、な感じに仕
上げたと思います。

では、ごうごう。

〱冬の日の再会〱

僕が彼女に出会えたのは、綺麗な冬空に星が瞬く、夜の公園だった。

その日、進路の事で両親と殴り合いに発展しかけるほどの大喧嘩をしてしまった僕は、脱兎の如く家を飛び出した。十五歳の思い付き、日帰りの家出だ。一夜をいつもの公園で過ごして、明け方に家へ帰る、という、どこにでもいる子供によくありそうな（本当か？）、ちよつとした反抗だった。

黒いナイキのジャージを着て公園に向かう僕の体を、凍てつく冬の風が震わせた。それもそのはず。とある雪の街で、十二月の午後十時頃なら、気温は軽く零度を下回る。そんな中、スポーツ用のスパツツとヒートテックを来ているとは言え、こんな薄手の装備で一夜を過ごすのは、かなり不安だった。

「うう」。こんな事なら、コート一枚羽織って来るんだった」

そんなことを呟きながら、僕はうつすらと雪の積もった道を、早足で歩いた。

ふと上を見上げると、ちょうど目の前を流れ星の光が走った。なにかありそうな気がする。そんな感じがした。

公園の前まで着くと、何の迷いも無く中に入る。そのまま真っすぐ

に進み、いつもの場所である滑り台まで行こうとした時、何となくチラッと横を見た。そこには……………

「……………は？」

少女がいた。誰もいないはずのブランコ。その片方に、短めに切った黒髪の少女が座っていた。この寒空なのに、白いワンピースを着て、弁当を食べている。って言うか、寒くないのか？こんな寒い日に、ワンピースだけで弁当を食べるって、どんだけ強靱な（イカレた、とも言つ）頭をしているんだらう？

とりあえず僕は、何も見なかったことにして、そのまま滑り台のほうへ向かう。すると、ギリギリ視界に入っていた少女が、チヨイチヨイと手招きするような仕草をした。

どうやら、僕のことを呼んでいるらしい。僕は、ため息をしながら彼女のほうに進行方向を変えた。

彼女の所まで行くと、隣り合っている片方のブランコを指差した。どうやら、座って、ということらしい。僕は言われた通りにブランコに座り、顔だけを彼女の方に向ける。

「で、なにか用？」

そう一言言うと、彼女は柔らかい笑顔を僕に向けてから、一度ペコリとお辞儀をして、口を開いた。

「久しぶり、ヨウイチ」

彼女の口から出た言葉は、なんと僕の名前だった。僕は、驚きのあ

まり、ポカンと阿保らしい表情をしたまま固まっていた。

それに、僕は何故か、彼女の事を知っているような気がしてならなかった。だけど、全く思い出せない。思い出そうとしても、何か鍵みたいな感じのナニカが封じ込められているような。

「やっぱり、忘れてるの………………。でも、良いよ。そのうち思い出すから」

そう言っただけは、弁当箱を鞆に閉まって、入れ違いに手の平サイズの宝石箱を取り出して、僕に手渡した。

それを開けようとしたけど、すぐさま彼女に押さえられた。

まだ開けてはダメ。そう言われて、僕は箱をジャージのポケットにしまう。それを見た少女は、空を見上げてゆっくりとブランコをこぎはじめた。キィ、キィ、キィ、と音を発てながら揺れるブランコと少女を見ながら、僕は彼女に話し掛けた。

「なあ、キミはどうして、僕の名前を知ってるの？」

そんなことを言うと、彼女はキョトンとした顔をしてから、クスツと笑った。それから、ブランコから下りると、僕の目の前にしゃがんで僕の頭をゆっくり撫でた。

「昔は、泣いてるあなたにこうして頭を撫でてあげたものね」

そう言う彼女を見つめながら、僕は一人の少女の事を思い出していた。

泣き虫だった昔の僕に。優しく撫でてくれた少女。冬の夜空のように真っ黒な黒髪に、日本人には珍しい、吸い込まれそうな碧い瞳。その娘の誕生日に、僕は確か青い星型の髪飾りを贈った覚えがある。そして、今僕の目の前にいる少女の黒髪にも、青い星型の髪飾りがつけてあった。

これではつきりした。今日の前にいる少女は、僕の幼なじみで……

「まさか、チエ、か？」

「うん。久しぶりね、ヨウイチ」

僕の初恋の人、チエだった。

だけど、僕と彼女は絶対に出会えない運命にあるのだ。だってチエは、五年前の交通事故で亡くなっているのだから。

でも、目の前にいる少女は本物だ。偽物ではない。僕は、そう信じる。

僕はゆっくりとチエに手を伸ばす。するとチエは、伸ばした僕の手を取って、ゆっくりと言った。

「やっと会えた。でも、もう会えないの。私はね、それを渡しに来たんだよ」

そういつて、チエは僕のジャージのポケットを指差す。そこには、先程彼女から受け取った小箱が入っている。

いつの間にか、僕の頬を涙が伝った。それを見たチエは、ゆっくりと僕の頬に手を当てて、涙を拭きとる。そして、僕の胸に手を当ててからゆっくり寄り掛かり、小さく呟く。

「でも、私に会えないからって悲しまないで。私は、ヨウイチの心の中にいるから」

そう言ってゆっくり立ち上がって、僕に背中を向ける。僕もそれに釣られて立ち上がり、チエに手を伸ばした。伝えたい言葉があった。だから……っ！

「待って、チエっ」

彼女の肩に触られる。それまで、あとほんの20?というそんな時、公園に強い風が吹き荒れた。

手を顔の前に翳して、舞い上がる土と雪を防ぎながら、僕は前を見て手を伸ばす。

チエは前をゆっくり歩いている。本当にゆっくりだ。その時、風とか雪とか、全部無視して走ればなんとか追いつけたかもしれない。でも、そんな事を考えていられるほどの余裕なんて、僕には無かった。

「チエ……っ！」

掻き消されてしまうと分かっているながらも、僕は叫んだ。その声は、やっぱり普通に掻き消されて、チエに届くことは無かった。

そう思っていた。でも、それは違ったのかもしれない。

叫んだ直後だった。強い風が吹く中、薄目を開けていた僕は見た。

その風の向こう、チエが僕の方に向き直って、叫んだ。その声は、確かに僕の耳に届いた。『大好きだよっ！』って。

すると次の瞬間、今まで以上に強い風にさらされ、僕は吹き飛んでブランコの辺りまで飛ばされてしまった。

ブランコに頭を打ってしまい、後頭部がズキズキ痛む。

でも聞こえた。チエの声が。

その後、頭の痛みが引いた後に僕は再びブランコに乗って空を見つめた。

ふと右手を見ると、いつの間にか出したのかジャージのポケットに入っていた、チエから受け取った小箱と握っていた。

青い皮で作られた手のひらサイズの宝石箱。頂点には黄色のビーズが付いていて、手作り感があふれる作りになっている。それを僕はゆっくりと開ける。

その中には、金色の紐に、青い装飾がなされた、ロケットという小さな写真が容れられる種類のペンダントだった。

ロケットの扉を開けると、そこには随分前に撮った僕とチエのツーショット写真が入っていた。

それを見て、再び涙がこぼれそうになるが、上を向いてなんとか堪える。

すると、右手で握っていた宝石箱からなにか落ちたような気がした。ふと下を向くと、そこには四つ折にした手紙のような物が落ちていた。

僕はそれを拾い上げ、開いてからゆっくりと読む。

『親愛なるヨウイチへ

今までありがとう

大好きだよ

チエ』

時は移ろいで、春

あの出来事から、既に五年の歳月が流れた。

僕はあのあと、喧嘩した父親とも和解、必死に勉強して高校に進学。高校でも真面目に勉強して、今は都内の名の知れた有名な大学の文学部で勉強している。

今でも、たまに彼女の声が聞こえるときがある。

辛いとき、悲しいとき、諦めかけたとき。頭の中に彼女の声が駆け巡る。『大丈夫、まだ行けるよ!』とか『頑張つてっ!』とか、色々だ。

そして、五年たった今でも、僕はあの時もらったペンダントを付けている。中の写真を友人に見られたとき「彼女かあ?モテるねえ!」とか言われたけど、その時は胸を張ってこう言った。

「俺の彼女、可愛いつしょ? 写真は十年前のやつだけど、今度会いに行くんだ」

会いに行く。それは嘘ではない。お墓参りだ。一ヶ月に一回の頻度で行っている。多いかもしれないけど、遠方にある為、それくらいしかいけないのだ。

今度、俺にも紹介してよ、と友人が言いかけたとき、始業開始五分前のチャイムが鳴り響いた。それに乗じて、僕は荷物をまとめて部屋を飛び出す。友人も、そのあとをついて来る。

チエ、僕は元気にやってるよ。明日、会いに行く。好きだったきんつば、買っていくから、もう少し待っててね。

うん、待ってるね

心の中の呟きに、チエが答えた気がした。声が聞こえた僕は、一度立ち止まって胸に手を当てて目を閉じる。友人が何やってんだ?、と聞いてきたけど、僕は何でもないと答えて、また教室までの道を走り出した。

『冬の日の再会』（後書き）

どうでしょうか？

感想、意見、三題嚙のお題等、お待ちしております。

今作登場人物

ヨウイチ：今作の主人公。五年前の交通事故で、初恋の人を亡くしている。

チエ：今作のヒロイン。五年前の交通事故で亡くなった、ヨウイチの初恋の人。

（2011/09/01タイトル及び後書き修正）

く光く（前書き）

今日から、詩みたいなのも書いていきます。

ちなみにタイトルは内容のイメージで考えていきます。

これには、作者自身の実体験が混ざっている事がありますが、それがどうでもいい人のみ、読んでください。

それでは、よろしく願います。どうぞぞ！

光

助けて、って声がした。

僕はそれに手を伸ばした。

そして、僕は仕事を始めた。

最初は、助けることに、なにか生き甲斐を感じていた。

助けてあげて、感謝されるのが嬉しかった。

でも、そんなことを続けて、僕の体はいつの間にかボロボロになっていた。

嫌な仕事を沢山やったから？

押し付けられるようにやった仕事も、何も文句言わずにやったから？

違う。二つとも違う。

ただ、感謝されなくなっただ。

終わったよ、って言っても、何も言わないで去っていく。まるで、僕が何かの道具のように、ただ良いように使って棄てていく。

そして、仕事を失敗すると暴力を振るった。

暴力を振るわなくても、罵倒の言葉を沢山言われた。

そのせいで、僕は本当の笑顔が出来なくなってしまっていた。

でも、それを君が助けてくれた。

最初は、君との話は面白くなかった。放っておいてほしかった。

でも、回を重ねるごとに、僕は君に惹かれていった。

たまたま一緒に帰った時に、君の過去を知った。

その時僕は、君を守りたいと思った。

過去の、思い返したくない事を静かに語る君の顔は、どこか無理を
していて、苦しそうだった。

僕は誓った。もう、迷わない。多分、君の事が好きだから。

何があったって構わない。自分が傷ついたって、別にどうでもいい。

だから僕は、これから先ずっと、君の事を守っていく。

たまに君は言う。私の近くにいと、不幸になっちゃうよ、って。

でも、それでも良い。守るため、君の前にある障害は、僕がすべて
取り除こう。

だから、君は心配しないで。傷つくのは慣れている。

ボロボロの体に鞭打って。何度目になるだろうか？僕はまた、そん
な体で死地に行く。

泣き顔は絶対にもう見せない。君に笑っていてほしいから、僕はも

もう少し頑張ってみよう。

く光く（後書き）

いかがでしょうか？

感想、意見、三題嚙のお題など、お待ちしております。

（2011/09/01タイトル変更）

く大切なものと永遠の願いく（前書き）

今回から、短編も書き始めました。

理由は、三題嚙だけじゃ、ネタに詰まりはじめてしまったからです。本当にすみません。

では、二つ目の短編、少し妬けになって書いたので、出来は余りよくありませんが、どうぞ楽しんでください！

く大切なものと永遠の願いく

彼は、失いすぎた。

失いすぎたモノは、一体何なのか？

それは、誰にも分かりはしないだろう。もちろん彼ですら、もうわからない。ただ、『大切なもの』を、彼は失い続けたのだ。

家族かもしれない、友人かもしれない。それが何かは、わからない。ただ、彼は失いつづけた。

彼には、全く罪は無い。そして、消えて逝った『大切なもの』にも、罪は無い。

彼は歎いた。一つ、また一つと失う度に「また、守れなかった」と。

だから、彼は力を付けようとした。だけど、それは無意味だった。

力をつけても、世界の理には逆らえない。彼は、また、大切なものを失った。

だけど、そんな時、彼女と出会った。

彼女は、とても快活な少女だった。人付き合いが上手く、お喋りも上手。彼のいる場所の中心として、周りの人を引っ張っていく。そんな人だった。彼女自身、大切なものを失うことがあっても決して悲しみの表情を見せなかった。

でも、そんな彼女も泣いていた。彼は、偶然見てしまったのだ。

他の人がいない、湖のほとり。そこで、彼女はうずくまって泣いていた。彼女は、小さな声で言っていた。「ごめんなさい、守れなくて、ごめんなさい」と、延々と。

そこに、彼は惹かれたのかもしれない。

決して、弱みを握ってどうこうという訳ではない。ただ純粹に、自分と似ているから、こんな悲しみを背負うのは、自分だけでいい。彼女には、悲しませたくない。そう思ったからだと思う。

だから、彼は彼女に声をかけた。そこから、物語は始まった。

最初は、あまり会話にならないことが多かった。しかし、月日を、回数を重ねていくにつれて、どんどん会話は弾むようになっていった。次第に、彼にも、彼女にも笑顔が浮かぶようになっていった。

しかし、現実はそう甘くない。

再び、戦いが始まったのだ。

「シオン、そっちの部隊は!？」

『まだ何とか保ってるけど、四分の一がやられた!こっちももう保たない!!--』

「……………分かった。何とか目を眩ました後、本隊と合流して！そこから、一気に攻勢に出るよ！」

『……………了解。じゃ、後で』

そう言つて、彼との無線が途絶えた。私は岩影に隠れながら、正面に展開している敵軍をチラッと見る。兵数はざっと三百以上。こちらの残存兵数は百少し。人海戦術に出られた今回の戦闘、明らかにこっちが不利だ。でも……………

(生き残るって、決めたから。生き残って、全部終わらせて、彼と……………)

そこまで考えてから、右手に持ったオートマ式のハンドガンを胸に当て、静かに咳く。

「私は、負けない。どうか、神の御加護が在らん事を」

私は、覚悟を決めて、いつきに岩影から飛び出した。

「はあ、はあ、はあ、はあ！」

銃声が鳴りやむことを知らない林の中、俺は必死を走っていた。

俺が受け持っていた部隊、正確には俺が所属していた部隊はほぼ全

滅。唯一生き残れた俺と、年上の友人は、ルートを分けてそれぞれ本隊へと合流する計画を立てていた。

でも、その友人は殺された。そのルートに張り込んでいた敵兵に撃たれ、死んでしまった。インカムから聞こえた、彼の最後の言葉、それは「リアラを、泣かすなよ?」。自分の妹を悲しませるな、ということ。

（ああ、守ってみせるさ。俺の全力で　　！）

そう心の中で思い、俺はさらに走る速度を速めた。

何分か走ると、右手に付けていたレーダーに味方の反応が出た。数は二十。こちらに向かってきていた。

彼は急いでインカムの電波の波長を合わせると、すぐさま連絡をとる。

「リアラ！無事!？」

『シオン！生きてたのね!？良かった……今どこに?』

「そこから西に三十メートルのところ」

そういつて、彼もその方向を見る。するとそこには、彼女が連れて来た味方達が一緒に来ていた。彼女も、彼を見つけると手を振って駆けて来る。

「シオン！」

彼の名前を叫ぶと、彼女は勢いよく抱き着いた。やっと会えた彼から、離れたくない一心で。

「リアラ。良かった、どこにもケガは……………」

バババババババツツ！！

言いかけてから、彼のすぐ近くの木に連続して弾丸が放たれる。敵軍の機銃掃射だ。

「くっ、みんな。とりあえずこの近くの洞窟に……………」

そうシオンが言うが、味方の兵は聞かない。それどころか、リアラとシオンを囲むように配置し、周囲に機銃を向ける。

「シオンとリアラは、先に行け！」

「此処は俺達が止めるから、アンタラは森を抜けな！」

その二人に続くように、シオン達を森から脱出させることを急かすような声を放ちつづけ、機銃を放つ彼等。その言葉に躊躇うリアラだが、シオンは行動が早かった。

「……………幸運を祈る」

そういうと、シオンはリアラをおぶって駆け出した。その目に涙を浮かべながら。

何とか森を脱出した二人だったが、周りは既に敵兵だらけ。逃げられる確率は、皆無に等しいだろう。

「シオン」

リアラは心配そうにシオンを見つめる。するとシオンは、そんな顔をしているリアラの頭を優しく撫でる。

「もう、生き残れないかも。でも、一緒にはなれるよ」

そういいながら、彼はポケットから閃光玉を取り出し、空高く投げる。それは強烈な光を放ち、周りにいる敵兵すべての目を潰す。

「リアラ、愛してる」

突然の告白に、戸惑うリアラ。そして、頬を紅潮させながらも、彼女はゆっくりと言う。

「私も、愛してる」

そう言いながら、二人は口付けを交わす。そして、その体勢のまま、リアラはポケットから球体を取り出し、ピンを外すと、ゆっくりと地面に落とし……

その球体は、強烈な熱波と爆風を発生させ、その周辺半径五キロ圏内のものすべてを消滅させた。

その一大事から、長い時が流れ

「……………あ、お待ちせ、セレナ」

「あーっ！遅いよレナード！！」

とある街角に、一組の男女がいる。

一人はセレナ。セレナリアラート Rリアラート フェディック。特別な呼び方は、『リアラ』。

もう一人はレナード。レナードシオネルド Sシオネルド ケヴァッド。特別な呼び方は、『シオン』。

遠い過去の二人の遺伝子と運命の赤い糸、二人の願いは、遙か未来

へと繋がっていった。

その二人の願いとは

「私たち、ずっと一緒よね？」

「ああ、ずっと一緒だよ、リアラ」

二人はゆっくりと口付けを交わす。そう、その願いとは

『二人が永遠に、愛し合える存在に、大切な人モノになること』

〜大切なものと永遠の願い〜（後書き）

感想、意見、「こんなジャンル、ストーリーのお話を読みたい」というご希望がありましたら、よろしく願いします！

現在リクエストをされている作者様へ。

もう少し時間がかかりそうです。大分お待たせさせてしまっていますが、もう少しで出来そうなので、もう少しお待ちください。よろしく願いします！

では、次回もお楽しみに！

今作登場人物

シオン

レジスタンスの一員。リアラの恋人。この物語前半の主人公。

リアラ

レジスタンスのリーダー。シオンの恋人。

セレナ＝R＝フェディック

イギリスに住むお嬢様。リアラの血を引いており、レナードの幼なじみで恋人。

レナード=S=ケヴァッド
イギリスに住む青年。シオンの血を引いており、セレナの幼なじみ
で恋人。

Dear……（前書き）

今回は、歌詞です。

……はい？作詞なんか出来るのかつて？

一応、二年前は小説執筆より、こっちがメインでした（現実で）。
まあ、作詞は出来ても作曲は出来ないんですけどね。作曲出来る友人がほしい（泣）

で、今回のこれは、一番だけです。A A B サビという順番です。

これは、私が書いている一次創作『雪ふる丘で』で、主人公が作詞作曲した曲、という設定です。

では、どござー！

D e a r ……

君と出逢った、あの坂の下。

桜が舞い散る、春の日の出来事。

初めて見かけた、君の表情かおには、

不安がいっぱい、詰まっていた。

あの日から僕たち、幾日も時を重ね、

いつの間にか、大切な存在になっていた。

君といれば、なんでも出来る。

そんな馬鹿なこと、思っていたんだ。

夢を諦めたあの日から、何もせずに過ごしてきた。

でも、君と巡り会って、

すべてが変わった……………！！

愛していると、言い切れる。

その事が、一番の自慢さ。

永久に想い続ける。

君の事が、大好きだ。

その事実、絶対に変わらないから、離さない。

そう……………D e a r ……

親愛なるあなたへ……………

Dear……（後書き）

一番だけでしたが、いかがでしょうか？

これから、作詞だけは沢山する予定なので、良かったらアドバイスとかいただけるとうれしいです。

では、感想、意見、三題嚙のお代、こんなジャンル、作品の短編が読みたい、ということがありましたら、感想までよろしく願います！

では！

空に上がる大輪（ゆめ）（前書き）

今回は、ボカロのとある作品をイメージして作ってみました。

どうぞー！

空に上がる大輪（ゆめ）

「最初から君を、好きにならなきゃ良かった」

夏祭りの終わり際。河原から花火がよく見えるそんな場所で、少年は少女に背を向けて呟いた。彼女はその言葉をしっかりと聞き取った。それがどんな意味を持つかの解釈をも交えて。

彼女の瞳から、ゆつくりと涙がこぼれる。そっか……………、と小さく呟いて、ゆつくりと手を差し出した。少年は、差し出されたその手に自分の手を重ね……………

「……………さよなら」

一気に駆けだした。花火大会の雑踏も、一発一発の花火に向けての完成も、少女の泪も無視して……………
ただひたすらに走った。

そう、分かってる。

「もし世界の終わりが、今訪れたら、全部ほっぽって、ふたり永遠に一緒なのに」

夢を叶えたら、必ずこの町に戻ってくる。それがいつになるかわからないけど、絶対に戻ってくるから……………リン。

ジリリリリリリリ……………

備え付けのベッドの隣に置いてあるサイドテーブルに置いてある目覚まし時計が鳴り響いた。それに何とか気づいた少年は、眠い目をこすりながら目覚ましを止め、時計を見る。

「……………あ、今日、本番か」

少年　来栖^{くるす}レンは、そう呟いてベッドからゆっくりと降りて、昨夜準備しておいたスーツに着替え、簡単な朝食を作るための準備に取りかかる。今日は、トーストに目玉焼きで済まそう。そう思ってから、彼は準備する。

レンは大学生だ。学内でも三本の指にはいるほどの成績を誇り、メジャーデビューも近いと噂されるバンド『ハピネス』のボーカリストでもある。周りからすごいすごいとはやされるのを彼は嫌って、最近はまだ笑顔で受け流すだけになっているが。その笑顔も、心からの笑顔、とは到底言えず、不自然な笑顔になっている。

目玉焼きを作り終わったと同時にトーストも焼き上がり、できあがった目玉焼きをトーストにのせて皿に移し、テーブルに置いておく。

それから新聞を取りに行つて、それをベッドに投げ捨てる、サイドテーブルにあるケータイを代わりに取つて、メインテーブルにつく。

おもむろにケータイを開くと、待ち受け画面に留守録が一件入っているのに気が付いた。

誰だろうか？そんなことを少しだけ疑問に思いながら、彼は留守録をクリックし、再生する。

『レン……………頑張れ』

聞こえたのは彼女の声。必死に忘れようとして、でも結局忘れられなかった彼女の声。今の今まで連絡しなかった彼女は、レンのことを忘れていなかったのだ。

そのことを悟つた彼の瞳から、一滴の涙がこぼれ落ちた。

「あの時の言葉、君には、嘘だつてばれてんだろつな」

そう呟いて、ふと時計を見る。時刻はすでに七時を回っていた。そろそろ出発する時間だ。

「…………行くか」食べ終わった皿をキッチンに置いて、傍に置いておいたライブ用の荷物が入ったカバンを取ると、立ち上がって玄関に出る。

「行つてきます……………」

首をわずかに曲げて、後ろにある写真を見ながら、彼は出発した。

ライブハウス楽屋

そこには、レンを含めて五人が集まっていた。

「おまえら、頼むぞ。今日は俺らの将来がかかったステージだからな」

そう張り切って、バンドのリーダーが言う中、レンは一人離れて歌詞の確認をしていた。

本当は歌詞の確認なんかしてない。元々出来るのだから、やる必要はないのだ。でも

高校卒業してからこっちにきて、まだこっちの景色に慣れない。そのせいか解らないが

「レン、どうしたの？ 緊張してる？」

「ううん、大丈夫だよ、ミク」

いつも気にかけてくれてる、学部が同じバンドメンバーの娘に向けて笑顔も、不自然なままだ。

どれもこれも、あの時とは違う。きらびやかな祭なのに、あの時の華やかな祭とは違ってた。

頭の中でループする『レン………頑張れ』の留守電。

誰にも見られなかった涙が頬を伝う。その涙で、自分の夢の花火を消してしまいそうだった。

「ハピネスのみなさん、お願いします」

そう呼ばれ、彼はステージに立った。

マイクを取り、話す。いつも通り、来てくれてありがとう。今日は楽しんでいって！

ギターが掻き鳴らされ、ドラムが唸り、キーボードが響く。そんな中、彼は歌いだす。

歌いながら、彼は思い出した。

あの夏祭りじゃないときの夏祭り。彼女から唐突にもらったキス。彼自身驚いたし、リン本人も真っ赤になって恥ずかしがっていた。

そう、きっとそれが、宇宙のハジマリ。それなら、あの星空は、二

人が愛し合った、奇跡の証だったんだと。

ライブは見事成功。今は各に帰宅の途に付いている。

ヘッドホンで次のライブ用の曲を聞いている時、彼は考えていた。

生まれも、育ちも、全く違う僕ら

姿も、形も、それぞれな僕ら

男と、女、ちぐはぐな僕ら

それでも、僕は

「そっか、そういうことか」

小さく呟くと、彼は走り出した。

「噛み合わなくなっちゃって、僕らは、心を一つにしたかったんだ」

そっけなく彼の真上で、大きな花火が唸った。

そう、今日は、夏祭り。

無限に広がる、幾千の光。

この夢と心に乗せて、いざ一直線に上がれ。

声が出なくても、どうしよどうしよって焦っても。

この気持ちよ、花火のように打ち上がれ。

Fire Flower。さあ、高く舞い上がれ。君と、僕の夢とともに。

「はあ、今日も一人かあ」

少女は、河川敷で二日間連続でやる花火大会を一人きりで過ごしていた。

「はっ はっ はっ
」

彼は走る。彼女が、そこにいると信じて。

花火が打ち上がった。ドオン、ドオン、ドオン、パチパチパチ、河川敷を色鮮やかに照らし出し、二人を映し出した。

「え？」

「最初から」

少女は彼を見つめる。まるで、彼がそこにいることが信じられないかのような表情で。

「君の事を」

少年は続ける。彼女がそこにいることに確信を持っていた、信じていたから、息の切れた声で、話しつづける。

「好きでいられて、良かった」

今宵、二人の心が繋がった。

人生とは、閃光花火の様なもの。小さくなり、大きくなってから、小さくなって、消える。

だから、一瞬でも、二人を照らすヒマワリのように、大きくなる。

だから、君の想い人、君の事を想ってくれている人は、君が夜空に大輪を咲かすまで、待っているんだ。

そう、その大輪の名前は

『Fire
FLOWER』

空に上がる大輪（ゆめ）（後書き）

感想など、お待ちしております

登場人物

来栖レン：主人公。リンとは恋仲だったが……？

リン：ヒロイン。レンとは恋仲だったが

しゅめん、さよなら………ありがとう（前書き）

突発的に書いてしまいました。

後悔は有りませんよ？勿論です。

では、どうぞ！

今回の話では、筆者の持論が述べられています。

いめん、さよなら………ありがとう

た俺は今、『浮いている』。冗談とかじゃなく、本当に浮いている。見下ろすと、ほぼ真下に俺の体がある。花が沢山敷き詰められている棺の中に俺の体がある。棺の周りには、俺の見知った顔が沢山あって、俺の事を見てはずっと泣いている。

そっか。俺、死んだんだ。

ややあって、俺はやっとその事を思い出した。

死因は全く覚えていない。ただ、手首に切り傷がある。これは、自殺なのだろうか？それとも、突然死なのだろうか？その事自体、全く思い出せない。

何はともあれ、俺は死んだ。それは、絶対に揺るがない真実。

俺が生きている間、俺はよく『死』そのものについて考えていた。

死とは何か？

死ぬとは、一体どういうことなのか？

心臓が停止したら、その時点でその人に『死』が訪れるのか？

まてまで、幽霊の存在が有りと考えるなら、幽霊である彼等は本当に『死んでいる』のだろうか？

魂とは一体何か？

魂が存在するなら、それはどこに存在するのか？

そんなしょうもない、ネガティブ思考まっしぐらな事、単純で、逆に難しいことを、ずっと考えていた。

そして、今分かった。

だけど、これは俺の一意見であり、真実ではない。あくまでも予想だ。

その意見とは

『精神と肉体が離別し、その双方が活動機能を停止する』

あくまでもこれは、幽霊の存在を考えての意見、ということを入れて聞いてほしい。

つまり、心停止が起き、蘇生する見込がない、となれば、それは『肉体的な死』となる。そして、幽霊が成仏し、消滅すれば『精神的な死』となるわけだ。この成仏というものは、言ってみれば『心残りがなくなる』ことだろう。つまり、現世に強い心残りがある人の精神が具現化し、幽霊となるのだ（俺の一意見）。

つまり、今の俺の状態は、『肉体的な死』は迎えたが、心残りが有るため『精神的な死』は向かえていない、つまり、まだ死んでいない、という事だ。

俺はゆっくりと降下し、機能を停止させた俺の体が見えるところまで降りる。

そして、俺はその体に触れる。もちろん、今の俺は意識だけの存在だから、温かいとか、冷たいとかの感覚はない。ただ

硬い。人の体って、死んだらホントに硬くなるんだ。で、ヒトってこんな簡単に死んじゃうんだ

そんなことを、虚しくつぶやいた。もちろん、誰にも聞こえていない。

俺はそこに立って、周りを見渡す。そこには、沢山の知っている顔がある。

父さん、母さん、じいちゃん、ばあちゃん、学校の友人、先生方、そして アイツ。

アイツは、小さい頃からずっと一緒にいて、いつも一緒にいた。アイツには、沢山迷惑かけたし、色々な場面で助けられた。それなのに、俺はずっとツンケンしていて、「ありがとう」とか「ごめん」の一言も言えなかった。言わないで、自分の気持ちに気づかないフリして、嘘を付いて、ずっと突き放していた。

こんなんじゃない、こんなんじゃない

「分かった。俺の心残り。つーか、これじゃ強すぎて死ねないんじゃないね?」

そう自嘲気味に呟いた時、俺は白い光に包まれた

葬式後。

少女は、皆が通夜の食事をしている間、ロビーで一人、涙を流していた。

死んだのは、少女が大好きだった少年。彼女がよく世話を焼いて、どこか鬱陶しそうだったけど、決して「嫌だ」とは言わず、ただ静かに、ツンケンしながらも受け入れていた少年。ツンデレの『デレ』の部分を見せないくせに、彼女が困っていると、いつでも手を差し延べてくれた少年。

だから、彼女は彼を好きになった。

「ねえ、カイト。どうして死んじゃったの？」

少女の声は届かない。彼は死んでいる。届くはずがない。

いつの間にか、少女の足は少年が眠っている棺に向いていた。

少女が棺の前に立つと、上の方に有る小窓をゆっくりと開ける。すると、そこには安らかに眠る少年の姿があった。棺の中には、彼の好きだった桔梗の花で埋め尽くされていて、彼の体を桔梗色に彩っている。

「ねえ、サトル。何で死んじゃったの？何で、私を

」

置いて逝っちゃったの？私、君の事が、大好きだったのに

少女の届かぬ声と想いは、外で降り続く雨音に掻き消されていった。

夜。

一人帰宅した少女は、風呂に入ってから自室に戻ると、そのままベツドに倒れ込む。

「ああ、こんな悲劇、全部夢だったら良いのに」

少女が小さく呟くと、そのまま意識を手放し、深い眠りの淵へと落ちていった。

て。

きて。

え きて。

ねえ、起きて？

少女は、そんな自分を起こすような声で目覚めた。時計を見ると、まだ午前二時。まだまだ寝ていられる時間だ。

あ、起きた？

「え？」

聞き覚えのある声で、少女の意識は完全覚醒した。少しぼやける目を擦りながら、視界をハッキリさせて前を見る。するとそこには。

「なんで、いるの？」

そこに居たのは、死んだ筈の少年だった。しかし、とうの本人はしれっとした顔をしている。

えっと、心残りが有るから？

「心、残り？」

少年はそう言いながら、少女の隣に座る。少女の鼓動が速くなる。ドキドキ、ドキドキ、ドキドキ、と、高く鳴り響く。

うん、心残り、二つもあんだよ。いくつも有る内の、二つまで絞って、それを全部お前に費やすんだから、感謝しろよな？

相変わらずのツンケンっぷり。それを見て「やっぱりサトルだ」と確信しながら、少女は話しつつづける。

「一つは？」

一つは、明日の朝に届くやつを始めてほしい。お前なら、きっと成功するから

「うん サトルッ!？」

一つ目の心残りを言った時、少年の体が足から粒子になって消えていく。彼女と会える時間が、尽きようとしているのだ。

「待ってサトル!もつと話しを っ!」

もう限界みたい。もう一つの心残りは、君に言えなかったこと

少女が少年に手を伸ばし、抱きしめようとする。しかし、それより速く

「 ツツツツ!?!?!?」

少年と少女の距離が零になり、少年の唇と少女の唇が重なり合った。

最初で最後なんだから、有り難く思えよ?それじゃ

ゆっくりと少年が後ずさる。そして

「今まで迷惑かけてゴメン。さよなら、そして、ありがとう。大好きな」

はっきりと聞こえた彼の声と、確かに感じた彼の唇の感覚。それを残して少年は、今までの謝罪と別れ、そして感謝と告白の言葉を残し、完全に消え去った

五年後。

一人の女性ギタリストが、ソロアーティストとして音楽界に姿を現した。

その女性の心に響く声とギター。そして、哀しくも前に向かって進んで行こうと言う雰囲気を持たせる歌詞に、多くの人が共感し、勇気をもらった。そして、女性ギタリストは瞬く間に一流アーティストとなり、今や世界各国を飛び回っている国際的アーティストになっている。

その女性の名前は、杉森カナエ。

そして、彼女のデビューシングル『届かなくても』。作詞作曲は、石之宮サトル。

『この声が、この想いが、遠くにいる君に届かなくなったらって。僕は想うよ、君に届かせるよ』

今まで沢山迷惑かけたけど、それ全部裏返せば、それは僕の本当の気持ちなんだよ？

もう届かなくても、何も届かなくても
どんな手段使っても、この心、この声、届かせるよ

君の事、大好きだから
君の事、愛しているから』

今を生きる、少女の想い。

記憶の中だけで生きる、少年の心。

そして、二人の真の願い。

それは今、一つに溶け合って、永遠に世界を巡り廻り、響き渡るだ
ろう。

いめん、さよなら……ありがとう（後書き）

いかがでしたか？

感想など、お待ちしております。

あと、今回載せた、筆者の『死』についての持論に触れてくださると嬉しいです。

では！

登場人物

石之宮サトル：今作での『俺』若しくは『少年』。何かしらの理由で、15歳という若さで亡くなってしまう。

杉森カナエ：今作での『少女』若しくは『女性ギタリスト』。サトルに恋心を抱いていたが、サトルが突然亡くなってしまい、悲しみにくれている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3043p/>

気ままに短編集

2011年11月27日23時53分発行